

「愛に生き、生を愛せ」(1)

——クレメンス・ブレンターノとゾフィー・メローの往復書簡——

序 論

ダグマール・フォン・ゲルスドルフ

中野隆正訳

1 始まり (1798—1800)

ゾフィーに。

愛が私のまわりで創造的に変わったとき、
すべての無上の喜びはあなたからやってきた。

美しい精神の手引で

目の前が開け、

私の存在の頂点に立って以来、

全世界は私の下へ消えていった。

ただ私が展望をふたたび見出しさえすれば、

病んだ心もおそらくいつか癒えるだろう。

ゾフィー・メローに、 クレメンス・ブレンターノ 1799年

1798年の年末、父の死後後見人であった異母兄のフランツに、学生クレメンス・ブレンターノは、これまでの成長過程を説明する長い手紙を書いた。この手紙はブレンターノのその先の人生を決定する要因が挙げられているので重要である。

「今の世の中、ひとは2つのもののうちどちらかを選ぶことができる、人間か市民になることができます。」「わたしは、おそらく市民にはならないでしょう。というのはわたしの心、頭、性格の残骸以外、教育から喜びや財産になるものは何も残らなかったからです。わたしは人間になるでしょう、しかも充ちたりた人間に。」と彼は書いている。

クレメンスは医学の勉強を中止するという自分の決断を、この手紙で弁護している。とりわけ彼は、この決定のさい市民の伝統的職業を拒否するばかりでなく、一般にどんな仕事も習おうとはしていない。それは彼の生活全体を破滅へと追い込むことになり、そして彼の本性の落ち着きのなさを強めることなので、ゾフィーはのちに彼に次のような手紙を書く。「単純な作業、労働、肉体的な骨のおれる仕事によって、もっと落ち着くように努めてください、しかし真面目に辛棒強く。」またほかのときに「愛する人私を信じてください。それは病気です、おねがだから医者にご相談してください。やむをえなければ畑をたがやし木を挽くことを学んでください。」(1803)この手紙を書いた2カ月後、彼女は彼と結婚する。

「わたしは医者になるつもりはありません、わたしのあわれな兄さんが法律家であるようには。兄さんは彼の美しいところをぜんぶ、楽しみをすべて棄てさらねばなりませんでした。」とクレメンスはフランスに書いている。そして彼はその素質からいっても、知識の不足によっても、そして「偏った」知識によっても、医者になることはできなかった。事実、若いブレンターノは親戚で育てられ、さまざまな学校で教育され、不統一な教育しか受けていなかった。学校を終えたのち、彼を商人に仕込むという父の努力は失敗した。

クレメンス・マリア・ヴェンツェスラウス・ブレンターノは、1778年9月9日にエーレンブライトシュタインの祖母ゾフィー・ラ・ロッシュの家で生まれた。ラ・ロッシュは多くの人に読まれた女流作家であり、また「フォン・シュテルンハイム嬢物語」の著者である。彼の父ペーター・アントン・ブレンターノ（1735—1797）は、最初の結婚で6人の子供をえた。妻の死後彼は、ゲーテの幼なじみであったマクシミリアーネ・ラ・ロッシュ（1756—1793）と結ばれる。この裕福なフランクフルトの商人との結婚で、彼女は12人の子供をもうけたが36歳で亡くなった。クレメンスは、母が死んだとき15歳であり、ゲオルク（1775）とゾフィー（1776）のあとに生まれた3番目の子であった。彼のあとには、クニグンデ（グンダ、1780）、クリスチャン（1784）、エリーザベト（ベッティエネ、1785）、ルドビカ（ルル、1787）、マグダレーナ（メリーネ、1788）が生まれた。ほかの4人の娘は早くに死んだ。

クレメンスは聡明で多方面に才能があったが集中できなかった。そして商売上のことにはすべてまったく無関心だった。彼は演劇や音楽の才能を、ようするに芸術的な才能をもっていた。彼の外見は、ブレンターノ家がイタリア系であることをあらわしている。褐色がかかった肌、暗褐色の目をもち、頭髪全体がカールしていた。体格はむしろ小さかったが、ひじょうに血気盛んで活動的だった。ゾフィー・メローの女友達シャルロッテ・フォン・アーレフェルトは彼についてつぎのように書いている。「その青年は、当時若いポプラの木のようにすらりとしており、ひじょうに機敏でしなやかだったので、とてもみごとな跳躍をし、木登りを試みていた。静かに机にむかって座っていても、そのすこしあとではストーブに馬乗りになっている彼がみられた。そのさい彼の動きはとても静かだったので、ほとんど音もなく歩き動いた。それゆえ人びとに忍びよっておもしろがると、ティークは或るとき彼を咎めている。」

どんな仕事に彼にむいているのか？ハレではじめての官房学の勉強——こんにちわれわれがいう国民経済——は彼にはむいておらず、何ももたらさなかった。家族はそのあと彼を医者にすることに決めた。しかしフランスへの手紙では、ほかの進路にむかうことをしめしている。「わたしはこのまえの手紙で、小説を書いていることをあなたに知らせた。だから心配しないでください……………」その小説は「ゴドヴィあるいは母の石像。マリアの粗野なるロマン」 という名であった。

ここには使命感がはっきり認められる。書かれているようにクレメンは、「ミューズの女神と戦う」ことをのぞんでいる。作家へのこの急な転換はどこからきたのか、なぜこの小説のタイトルなのか。さしあたり兄弟にはよくわからなかったが、それに対しても手紙が説明をあたえる。

「わたしは学生たちとのつきあいをすべて辞めました。そしてただ幾人かの若くしてすでに好ましく名を知られた学者や教授達とのつきあいを楽しみ、そして肉体的精神的に亡き母の姿にそっくりな、すばらしい女流詩人、メロー教授夫人とのつきあいだけをとくに楽しむ、というぐらいにわたしは進歩しました。わたしは彼女とその夫の友情により、彼女のところで昼食をとり、毎日この高貴な夫人のサロンで数時間過ごします。この婦人の友情と信頼を受けていることを、わたしは喜んで誇りにしていいで

しょう。ようするにわたしの存在全体に、わたしの力のうえに、わたしの希望のうえに、友好的な光が広がっています。もしあなたがたが行くために立ちほだからなければ、わたしは偉大ではないにしても、親切で有用な人間になるだろうことを、はっきり確信しています。」

若くしてすでに名を知られた学者達のなかでは、フリードリッヒ・シュレーゲルの仲間が重要であった。それは若干の気心のあった作家、哲学者、出版業者、学生であり、そのなかには文学的才能のある医学生アウグスト・シュテファン・ヴィンケルマン（1780—1806）、ゾフィー・メローの年鑑の協力者クリンゲマン（1777—1831）、ブレンターノの断片的な物語「バラ」や最初の詩が載っている、雑誌「ムムノン」の編集者である自然哲学者ステフェンスがいた。ブレンターノの重要な生涯にわたる友情は、当時のイエーナで彼らのなかにはじまる。このサークルでの会話、彼らの著作、批評、討論といったものが彼に影響をあたえた。あたらしい世界が彼にひらけた。なぜなら今や彼は、自分の詩的才能をみただしたからである。テークの叙情詩に触れ、6歳年上のフリードリッヒ・シュレーゲルの輝かしい批評精神にすっかり感嘆したとき、彼は「新しい学派」イエーナ初期ロマン派の共同設立者になった。

ブレンターノの「ゴドヴィ」はシュレーゲルによって告示された初期ロマン派の小説の理想を実現しているが、それは作為的混乱や意図的な「荒廃」、様式の特徴的な要素の矛盾や戯れの混同といったものである。タイトル「ゴドヴィあるは母の石像」は、大理石の婦人像によって忘れられぬ自分の母マクシミリアーネの薄命を指摘している。クレメンスには母の姿が愛する人の姿と一つになっているのを、ゾフィー・メローへの手紙が証明している。「わたしはとくにあなたのことを考えました。」と彼は1799年、彼女に書いている。「わたしは妹と庭のなかを歩いているようでした（……………）、茂みにはあなたの大理石の像が立っていました。それはあなたの記念像だったのでわたしは泣きました。やれやれ、あなたは死んでいました。わたしはそれゆえ天国を信じました。というのはあなたはあまりにも弱かったので、わたしといっしょになることができなかつたからです。」この体験した夢から小説のテーマが発展していったのかもしれない。彼は子供であり、彼女は恋人であり母であった。つぎのような美しい詩もこのような精神の持ち主から生まれた。

おお母よ、おまえの子供を暖めよ
 世界は冷たく澄んでいる
 子供をそっとおまえの腕かひなに抱き、
 おまえの胸のふくらみをあてがえ……………

兄弟の強制がいやでたまらなかつたブレンターノにとって、フリードリッヒ・シュレーゲルの自己存在のアップール、自己の主体性の発展や限界からの解放のアップールは、世界獲得の新しい形を開いてみせるものであった。空想、陶酔、自然感情にもとずいた大胆な文学の草案は、彼のなかにもっとも有能な代表者をみいだしたのである。クレメンスはのちにゾフィー・メローにたいして要求しているような「自由な詩的存在」への可能性のなかに自分の新しい未来をみる。シュレーゲルの「ルチンデ」はあらゆる存在の中心かつ頂点として、ロマン主義の愛の解釈を彼につたえる。そして精神的、心的なあらゆる力の革命的変革をもたらすこの時代に、ブレンターノは彼自身の生涯にとって根源的力としての

愛の意味を知る。彼はゾフィー・メローに出会う。

1798年夏、彼の大学入学手続きのあとまもなくクレメンスは、ゾフィー・メローと知り合ったにちがいない。彼はシラー・フィヒテ、シェリング、フリース、リッター、フーフェラントといった有名な教授の近くで学ぶためにイエーナにやってきた。アウグスト・ヴィルヘルム・シュレーゲル(1767—1845)とフリードリッヒ・シュレーゲル(1772—1829)兄弟により、そしてその夫人達カロリーネ・シュレーゲル(1763—1809)とドロテア・ファイト(1763—1839)によって、彼は法学の教授フリードリッヒ・エルンスト・カール・メロー(1765—1825)の家へはいることができた。ここで彼はヘルダー、クネーベル、フォイクト、インド学者のフリードリッヒ・マエール、古典語学者ベティガーやアイヒシュテット、詩人マティソンと知り合いになった。ここでは社交的な集いもよおされたが、その中心は女流作家ゾフィー・メローだった。

その女流詩人は「まったく肉体的精神的にわれわれの亡き母の姿そのものです」と、兄への手紙には書かれている。クレメンスがゾフィー・メローに触れるのは、これがはじめてである。そして彼女が母にとっても似ているというような指摘は、彼のかわらぬ、ゆるがない愛着と、この出会いが運命的なものであることを、それとなく知らせている。それをフランツは当時予想することができなかった。クレメンス・ブレンターノはちょうど20歳であった。

「目覚める愛情と喜び」とあの時代にゾフィー・メローは日記に書いている。「Bの手紙、甘い告白、激しい感情と感動」

ゾフィー・メローが8歳年下のクレメンス・ブレンターノと知り合った時、彼女自身はすでに世に知られた女流作家であった。フリードリッヒ・シュレーゲルのような批判的精神の持ち主もほめたたえた、「好ましい充実と軽やかな飛躍」という彼女の詩は、シラーやゲーテの詩とならび評される。彼女は新時代の「サッポー」になり、「春と愛の歌い手」とよばれた。ゲーテの義兄弟ヴィルピウスやシェークスピアの翻訳家アウグスト・ヴィルヘルム・シュレーゲルは、彼女に詩をささげた。ヘルダーは、彼女の叙情詩についてみごとな書評をかいた。彼女の名声がどのていどだったかは、1796年の雑誌「ドイチュラント」に読み取ることができる。そのなかでゾフィー・メローはもっとも人気のあるドイツの詩人にかぞえられ、マチアス・クラウディウス、ゲーテ、ビュルガー、そしてヘルダーと同列におかれている。——この名聲は時代をこえてつづかなかった。こんにちゾフィー・メローの名前は、彼女自身の作品によるよりも、むしろクレメンス・ブレンターノとの関係によってわれわれには知られている。当時は逆だった。彼の物語「歌手」を彼女の選集「カラティスコス」に載せたとき、「メロー」は無名の学生ブレンターノを助けてはじめて人気をえさせた。

クレメンス・ブレンターノと出会ったとき28歳であったこの女流詩人は、その美しさと優雅さゆえに多くの人にとりまかれ、またその才気と非凡な教養のために賛美されていた。彼女は小柄で愛らしく、よく変わる暗い青い目をしており——ザクセン＝ゴータの公爵は敬意をこめて彼女を、「変わる空色」“*caméléons du ciel*”と呼んだ。——頬にえくぼがあり、黒いカールした髪をしていた。今日まで残っている数枚の肖像画は、彼女から発散する魅力をほとんど再現しえないでいる。彼女について報告しているすべての同時代人々は、「愛らしい」「優雅な」「柔和な」という特徴をあげており、彼女の寛大な調和のとれた人柄をえがきだしている。「あなたの生にたいする考えかた、かぎりない快活さ、

善良な心と柔和、わたしはそれをいつも目の前にみえています。」と1803年クレメンスは書いている。彼の友人でのちの義理の兄弟であるフリードリッヒ・カール・フォン・サヴィニー（1779—1861）は、人のこころを引きつけるきわめて魅力的な彼女の面だちを、ありありとつたえている。イエーナ出身の同胞でのちにシンメルマン伯爵の秘書になったヨハン・ゲオルク・リストは、「回想録」のなかでイエーナの人物についてゲーテのほかに彼女しかあつかっていない。

「あのサロンで可愛らしい人は、教授夫人メローだった。魅力的な小さな姿、ごくちいさなことにまで思いやりがあり、優雅で感受性にあふれていた……………当時彼女はセンスや趣味が必要なすべてのことで、たいへんほめそやされていた。彼女があらわれると、まわりに人垣ができた。そしてほとんど彼女ひとりだけに、賛美者の厚い群れがおしかけた。彼らは彼女のひとことや、ほほえみを手にいれようとした。そのまわりには、まだポカンと見ているひとびとが、はいりこめずに輪をつくっていた。」
「すばらしい」そして「才気あふれた」と彼は彼女についていっている。「詩」“Poesie”とゾフィー・メローは友人達によばれ、クレメンス・ブレンターノによって「プシュケ」“Psyche”とよばれた。ブレンターノは魅力的な教養の高い、不幸な結婚をしたこの婦人にはげしくほれこんだ。

肉体的、精神的に母の姿を——女の理想像を、クレメンス・ブレンターノはゾフィー・メローのなかに見いだした。そしてすぐさま彼女なしでは生きていけないのを感じた。「わたしはあなたなしに生きていけるかどうか、もう2時間も考えました。たぶんそれは不可能です。」（1799年8月）彼は母の肖像画を彼女にあずけ、ほとんど毎日彼女を訪問し、彼女の官能的な魅力にひきつけられると同時に、知的な影響もうけた。

ゾフィーはかがやくように美しい、すばらしい才能をもつ若い男の愛情にこたえる。彼は彼女のサロンで詩を書き、それを朗読し、ギターをひき、彼女はピアノで伴奏した。彼女の日記には生まれつつある感情が反映している。彼の姿がねてもさめても彼女から離れない。「愛の最初の接近。ながく楽しい逢う瀬。」（1799年6月1日）しかしまた、まもなく彼女は傷つきやすさ、おこりっぽさ、嫉妬というような彼の異常なふるまいを嘆く。彼女は彼の愛の容積がわからない。彼への愛情がつづくものかどうかわからない。「わたしは、日夜あなたへのはてしないあこがれに悩み、あなたを失うことをおそれているのに、あなたは昼寝をしていましたね。」と彼は、1799年夏に書いている。「もしわれわれがいっしょに暮らすことができたらと思うと、もうほかの生活は考えられない。」「ゾフィー、あなたがもっと愛してくれるように、わたしはほんとうに善良になりたい。」

ゾフィー・メローはこのように無条件な愛情を、もはやほとんど考えにいれることはできなかった。過去の友情や不満足な結婚生活は、彼女におおくの失望や、それどころか絶望をもたらした。のちに彼女はクレメンスにいう。「あなたにたいする関係は、わたしがこの世でもった、最初のまったく純粋で美しいものです。」

ゾフィー・フリーデリケ・メロー——婚姻証書で彼女はゾフィー・マリアという名である——は1770年3月28日にテューリングゲンのアルテンブルクで生まれた。母は彼女が16歳のとき亡くなった。彼女の父、公爵領ザクセンの税務官ゴットヘルフ・シューバルトは、2人の娘ヘンリエッテ（イエッテ、1769年生まれ）とゾフィーに、古典語、現代語、図画、音楽という当時の考えによれば、とくにすぐれた教育をあたえた。ゾフィーはのちに、小説、物語、叙情詩を4カ国語から翻訳した。ボッカチオの小説

「フィアメッタ」の翻訳は、今日まで再版されている。

この若く美しい娘は、5歳年上の法学生カール・メローによって、いちばん根気よく求婚された。彼はこの17歳の娘を、彼女の腹違いの兄弟フリードリッヒ・ピーラーを通して知りあったのであった。当時彼女の書類カバンに保管され束ねられていた彼の熱烈な恋文は、けっして問題のない婚約時代ではなかったことをあらわしている。ゾフィーは21歳で孤児になった。そして良い人との結びつきのなかで、落ち着きを得ることを頼りにしていた。けれども彼女は長年結婚に抵抗してきた。古風なバロック文字でぎっしりつめて書かれたメローの手紙を読めば、なぜこの結びつきに見込みがなかったか予想することができる。彼は、非常に大きな彼女の自由にたいする欲求を見落としている。彼は卑屈になるまで求婚しながら、いつも強要する者であり、彼女は彼が自殺すると脅かしたとき、ついに結婚を同意する譲歩する者だった。彼は彼女の性質を従順だといっているが、ゾフィーは満足しておらず不幸だった。結婚後もなく医学生キップとの親密な関係がはじまる。キップととりかわされた文通では、なにがゾフィーの生にたいする観念を形づくっているかそのすべてが説明されている。この手紙はのちにベッティーナを通して、ファルンハーゲン・フォン・エンゼの収集品になったが、エンゼは日記のなかでつぎのように書いている。文通には「愛の神格化と愛の全権利、結婚の軽蔑、詩的感性の評価、自由への苦闘、フランスへの注目」がのべられていると。その手紙に書いた思想は、ゾフィー・メローの小説にとりいれられた。ブレンターノの「ゴドヴィ」のように、体験した人生は文学のなかで変形されている。

結婚はうまくいかなかった。たしかにカール・メローは、ブレンターノが嫉妬のなかで描いたように、おそらく残忍な人物ではないだろう。誤解はむしろ両方にある。1794年と1797年に生まれた二人の子供達、グスタフとフルダはゾフィーの生活を楽しめるものにはできなかった。彼女のゆいつの関心は文学にあった。ここで彼女は自分にふさわしい領分をみている。逃避の場としてでなく、生きるために書く、という彼女のあたえた生の成就形式としての領分を。

クレメンスには「わたしはいま何週間も自由な詩的な気分を楽しんでいます。たくさんの詩が、ペンから流れでました。そしてたくさんのしあわせな午後を孤独のなかですごしました。必然性のつめたいいぶきによって、わたしの心の愛らしい花がすべて凍りついてしまうまで。——わたしは一生風変わりな戦いをしていきます。……わたしは櫓をつかむか、破滅しなければなりません。」(1799年11月)と書いている。

のちに彼女は非創造的に生きることはできないと認めている。「そうです。あなたはわたしを目覚めさせました。あなたはわたしに詩的な感性を、つまり神の愛する感性をふたたび与えました。それなしには、わたしにとって生は無限の重荷にすぎないのです。」(1803年9月)つまり生きつづけるために書くということ。

彼女は「ロマンチックな存在」をあつかうことを望み、「自由な詩的な雰囲気」のなかで詩的に主張することを望んだ。このような点で彼女はクレメンス・ブレンターノととくに近い。彼女の物語「ユーリエ・フォン・アルヴィアン」では、女主人公が狂気に追いやられるにしたがって、空想と現実を取り違える様子があつかっている。望ましくない現実の代りに待ちこがれた理想の世界をおくというこの危険に、この女流作家は屈しているわけではない。それには彼女はあまりにも理性的で、あまりにも円満であり、かつ意識的である。おおくの彼女の物語では、実際の、活動的生活、自分にあった生活のために女主人公を用意するということが、まさしくメローの場合問題なのである。

書くことは、ゾフィー・メローにとって「文学という色彩で、形のない存在のまわりを戯れること」を意味し、創造的、生産的に世界を復元することを意味する。ノヴァーリスがそうであるように、彼女にとって詩人とは最高の人間の階層である。よく議論的になり、あやまってブレンターノ作だとされた、1799年のヴィルヘルム・マイスター批判のなかで彼女が説明しているように、詩人とは同時に教師であり、占師であり、神々や人間達の友である。「神々をつくり、神々のところへわれわれをひきあげ、神々をわれわれのところへもたらそうと思うなら、詩人以外にだれがそれをなしえようか？」彼女は現実とフィクションの領域で、詩人は真の仲介者だとみている。「詩人は詩的真相を必要とする。——それはそれ自身矛盾はないが、現実的ではない対象を意味する。」彼女の哲学的な「観察」では、このように書かれている。

21歳のゾフィー・シューバルトは、シラーが1791年彼女の詩を「タリア」に載せたとき有名になった。シラーは友人になり、彼女をはげまし、彼女の文を添削し、勇気づけた。「わたしはおおいに喜んで彼女の詩を読んだ」と、彼は1795年書いている。「わたしは彼女が詩作したものすべてに跡をとどめている、おなじ瞑想の精神をそのなかにみいだした。彼女の空想は象徴的に見ることを好み、彼女に見えるものはすべて観念の表現として見ることを好んだ。」

ゾフィー24歳の最初の小説「感情の開花の年」は、あらゆる理性的考慮をこえた純粋な感情の勝利をあらわし、社会の抑圧にたいする個人の自由を要求している。包括的な意味で、自由は彼女のキーワードであり生活原理である。彼女の最初の詩「1790年6月14日のフランスの祝典に際して」のなかで彼女は、自分の小説のなかでも一つの役割を演じているフランス革命に感激している。

自由は人を気高くする。そして自由を手にする努力は、
それぞれ心の気高い人の力である。——

自由の意識は彼女の生の欲求である。彼女はのちにクレメンに書く。「ほんとうです。ある感情がわたしのなかにあります。あなたには無い唯一の感情が。それは自由の感情です。」

彼女の小説で恋人同士はさいごにアメリカへ移住する。——また二年後に出版されたゲーテの小説「ヴィルヘルム・マイスター」のように、当時それはあたらしい発展の可能性と自由な生活様式の典型であった。

書簡形式の二番目の小説「アマンダとエドアルト」は、1797年シラーの「傾聴」のなかではじめて一部が掲載された。その作品が文学史上興味深いのは、シラーの道德美学を十分理解して自分のものにしたいわゆる擬古典主義的造形方法から、ロマン主義的世界観にふさわしい表現形式への変化である。生を豊かな種々さまざまな迷路のような混乱だとみる方法に、個性の発展と自律の望みのなかに、ロマン主義の精神があらわれている。そしてクレメンス・ブレンターノとの出会いが、この本の執筆中、影響なしにはすまなかったことは想像にかたくない。それは小説のなかに差しはさまれた、いくつかの詩にあらわれている。

昼は消え去った、
夜は深い沈黙を守っている、
暗闇のその下では

鍛冶屋だけが目覚めている。
 そこでは^{フルート}笛が夜を貫いて、
 哀しみをうたう、
 夕べの空が赤く染まると
 いつも目覚める哀しみを――

この詩はブレンターノの有名な次のような詩を思いださせる。

聞け、^{フルート}笛はまた嘆きをうたい、
 そして古い泉はサラサラと流れる。

二十年前にゲーテがシャルロッテ・フォン・シュタイン夫人の生活に革命をひきおこしたように、年下のブレンターノは似たような革命を、ゾフィー・メローの生活にひきおこしたのかもしれない。もちろんゾフィー・メローは女官ではなかったし、礼儀作法にしばられているとは思っていなかった。彼女は1796年に、因習となっていた女性としての振舞を無視した。そして作詞家で、のちにアルトーナ銀行の頭取になったリュベックのゲオルク・フィリップ・シュミットと、14日間ライプツィヒ、デッサウ、ポツダム、ベルリンへ旅をした。――その出来事は後年嫉妬深いブレンターノによって非難され、途方もない出来事としてシラーとゲーテの往復書簡のなかにもでてくる。「われわれの女流詩人は数日前にわたしに手紙をよこしました。そして彼女の夫と恋人の話をわたしに告白しました。」このように「ちいさな美の話」について尋ねたゲーテにシラーは書いている。シラーはまた彼女の詩の進歩についても報告している。「われわれの友人メロー夫人はほんとうに一種の誠実なものをもっており、ときおり感情の品位さえもあります。そして一種の深みもまた、わたしは彼女のなかに認めないわけにはいきません。その深みは孤独な存在のなかでしか、そして世間に逆らってしか造れないものです。」（1797年8月17日）

「世間に逆らって」――ゾフィー・メローはその矛盾に悩んだ。「わたしのなかには、わたしに仕事をさせる世界、現実のなかにわたしが置きたいと思っている世界がある。それは観客にとって快適な観念である！わたしのなかにあるものを鍛えあげるためには、外の静けさだけが必要だった。――運命はこの静けさをわたしに許さなかった。すべてのものがわたしを窮地に追い込んだ。わたしのなかにある明るいイメージは、廢墟の花のようにただ時々あらわれる状態に追い込まれ、そのなかでは、わたしの柔軟さがわたしをささえていた。わたしの心の平静は夢であり、わたしの喜びは絶望の笑いであり、わたしの調和は遠くの祝宴会場から荒野をとおして響いてくる二三の切れ切れの音にすぎない。」

この日記の記録は絶望的にきこえる。しかしゾフィー・メローはあきらめなかった。忍耐とひたむきな努力、勇気と才能、体験したものを詩にするといったことが、この時代のほかの婦人達の運命から彼女を守った。彼女はカロリーネ・フォン・ギュンデローデのように、人生をあきらめようとはしなかった。そのカロリーネにクレメンスは1804年ゾフィーについて手紙を書いている。「わたしの妻は、あなたの心情から多くの家の雰囲気や、街の雰囲気を判断するでしょう。」「なぜなら彼女の本領は喜びにあり、その喜びのなかで彼女は子供のようでもあり、しばしば天使のようでもあるからです。」クレメ

ンスはゾフィーの生きる意欲，平均化の才能，明朗さに感心し，彼女にいう。「君ほどの生きる名人はいない。」

クレメンスが彼女の生活にはいったとき，ゾフィーは作家として新たな計画をたてる。彼女はバラバラに発行された自分の詩を一冊にする準備をし，さまざまな雑誌のために書き，「クレーブの奥方」をゲッチングンのロマン語図書館のために翻訳し，とりわけ友人のアイヒシュテットの忠告にしたがって，「カラティスコス」つまり「花かご」と彼女が名づけた自分の年鑑を計画する。その年鑑には，ほかの作家の作品もはいつている。クレメンスはその第一巻のために「歌手」という物語を書く。ゾフィーはそれをとてにも気にいったので，ひきつづいて創作をするよう彼に頼んだが，「花火師」は未発表に終わった。この「歌手」という物語はきわめて自伝的傾向をおびている。つまりゾフィーへの歌手の愛がえがかれている。クレメンスは，彼自身の複雑な体質，精神の緊張とエキセントリックな振舞のイメージを，この人物の姿にたくしている。

ゾフィー・メローは若いブレンターノが気まぐれで，落ち着きがないことに気づく。彼女はドルンブルク城への一緒の遠足や，昔の英雄ヴィーラントを訪ねるアポルダ近くのオスマンシュテットへの旅に，彼と行った。オスマンシュテットで彼女は彼の祖母ゾフィー・ラ・ロッシュや姉のゾフィーと知り合う。彼女は彼の風変わりなひととなりにも悩む。「数々の恐ろしい場面，さまざまな誤解」が，彼女の自筆でのこされた日記に読むことができる。「ドルンブルクへ，不機嫌なブレンターノ。さまざまな侮辱……」と1799年8月18日には書かれている。一方ブレンターノはおなじ日に手紙で彼女に愛をうちあげている。——1799年5月に彼女は義姉ヘンリエッテ・ピーラー＝ライヘンバッハのもとへ彼を送りだした。クレメンスはヘンリエッテの美しい18歳の妹ミンナに惚れ込んだ。——けれども報われなかった。おそらくそんなに本気ではなかったもので，ゾフィー・メローを忘れることはできなかったのだろう。なぜ彼はミンナにひきつけられたのか，ゾフィーに説明しようとしている。「われわれは，早くにきわめて内容のある観点でふれあうものがあつたので」と。(1799年夏)

ゾフィーの日記は1798年12月にブレンターノとの櫓の遠乗りや「彼の著書の朗読，拍手，こころよい快適な感動。」を，しかしまた「Bにたいする冷やかな態度，彼の落ち着きと落ち着きのなさ」を書きとめている。——一月に彼女は「Bのいない佻しさを話していること」に気づく。そして彼女の「彼にたいする奇妙な率直さ」に触れる。1799年1月30日と31日には「Bの穏やかな感情，望みと夢，苦しい喜び，忘却，諸計画」を書きとめている。メローとの結婚から解放されるという彼女の計画は，おそらくブレンターノの影響で当時強められただろう。というのは「Mとの激しい場面」は増していたからである。1799年3月には，「将来の選択」と「ブレンターノとの会話での絶え間ない動揺。彼の狂気。夕方不機嫌なブレンターノ」「幸福」「不満，彼にたいする疑惑」「情熱的な緊張した会話」が書いてある。日記は複雑な関係の盛衰を反映している。双方に不満が増していく。ゾフィーの傷心は，これまで公表されていない略式の手紙にあきらかである。「どうしてですか？ おおクレメンス，クレメンス！ 愛する，恐ろしい，神のような，残酷なクレメンス！——」

クレメンスが家族のもとに滞在していた，フランクフルトへの1799年11月の彼女の手紙には，いまから彼を働かせ，彼についていくだらうという文がでてくる。「誇り高く慎み深くあれ！ 愛に生き，生を愛しなさい。」

2 別 れ (1800—1802)

わたしがあなたの人生に関心を無くすなんて、思わないでしょうね。
たとえあなたがどこにしようと、あなたは私の目の前で行動していま
す。そして、あなたに対する私の気持ちがいつかわかるでしょう。

ゾフィー・メローに、 クレメンス・ブレンターノ、1801年

「あなたは長い間わたしのことを、何も耳にしていらないでしょうね。そしてあなたがふたたび耳にする最初の言葉は、いずれにせよ最後であるはずです。さようなら！」

知り合って二年後の1800年の夏、ゾフィー・メローはクレメンス・ブレンターノとの友情を、このように一方的に終わりにした。彼はたびたび彼女の心を傷つけ、最後には本気で侮辱した。もうこれ以上彼女は、彼の気紛れやぶっきらぼうな態度、嫉妬にさらされることを望まなかった。彼女がどのくらい深く心に打撃を与えられたかは、1801年にクレメンスの妹グンダにあてた彼女の手紙であきらかになる。

「クレメンスについてあなたが書いていることは、わたしに不審の念をおこさせます。というのは、わたしは今彼のことを静かに一生懸命、しかも、軽く考えているからです。そして彼はなぜそうではないのか？ このすばらしい人は人生になにを望んでいるのか。彼はわたしを侮辱しました。ひどく侮辱しました。彼自身がわれわれの間の全幅の信頼を引裂きました。わたしはあらゆる侮辱を平然と耐え忍ぶ聖女ではありません。けれども、わたしは彼の人の善良さと偉大さの、それぞれの美しいひらめきを感じるし、彼の運命にかかわっています。あなたを通して、わたしは彼の便りを聞きたいのです。しかし、あなた一人だけを通して！」

それにたいしてクレメンスは、あの絶望にみちた手紙（1801年12月頃）で彼女に答える。その手紙はすべて率直な発言ののちに、つぎのような文で終わっている。「このように妹のクニグンデは、わたしのために書きました。」

破局にいたる前に、ゾフィーは再三彼の落着きのなさ、彼の「^{デーモン}魔神」と戦うよう頼んだ。「生への才能をいずれにせよ調和のとれた全体へと彼が作りあげてくれたら。」

当時22歳のブレンターノは、あきらかにその状態にはなかった。彼の態度は予測できず、人柄は調和を欠いており、彼のウイットはとつぜん思いついて嘲笑的であり、発言はしばしば軽はずみであったので、1803年の二度目の再会のときにも、あやうく彼女の友情をあらためて取り逃がすところだった。そのときまでにももちろんゾフィー・メローは、彼を理解し、正しく受け入れることを学んではいた。これに反して1800年には彼女は辛抱できず、癩癩を起こした。彼女は夫婦間の惨めな状態に耐えきれず苦しんだ。五歳の息子グスタフの突然の死は彼女をひどく不幸にした。このような状態のなかで、ブレンターノとの交際をきっぱり打ち切ったのである。

ブレンターノとの関係は、ゾフィーにとって利益でもあれば重荷でもあった。彼女はそのなかで強い女、指導的な女の役割を負わねばならなかった。彼は無邪気な人間であり、要求する人間だった。往復書簡のなかで彼女はしばしば母を思い出させる役をひきうけ、あるいは男らしく強く「ゾフス」と話しかけられる。その役割分担は、さきに触れたクレメンスの物語「歌手」のなかにも、またはっきり読み

とることができる。この物語は、ところどころあたかも彼らの長い会話とお互いの関係を、彼が文字の形にしたかのように書かれている。ユーリエに次のように言わせるときには、彼はゾフィーの身になって考えているのである。「わたしがカールを深く愛しているときに、たびたび、わたしにたいする彼の功績を静かに考えます。しかし自由は軽率とおなじように、わたしの身についたものです。そしてわたしは義務の思想に、けっして長く耐えることはできない……………わたしは彼と完全に関係を断つという誘惑を、すぐに感じるから。」ユーリエ＝ゾフィーは言う。「カールとの関係のなかで、わたしは間違いなくより強い部分であり、全体を手中に収めている。いま確かにカールは極端な女のもとにいます。」

その物語が出版される前に、ゾフィーは実際彼と縁を切った。「Bとの友人関係は完全におわった。」とその決定を簡潔に日記のなかで述べている。

クレメンスはフリードリッヒ・シュレーゲルが、この不和に関与していなくはないと思っていた。シュレーゲルは自分よりも、はるかに優れていたブレンターノの詩的才能に気づかなかった。そして一方でシュレーゲルはフランクフルトの商人の息子に学位授与の費用を支払ってもらい、しかも彼にたいして熱心に陰謀を企てていた。そしてブレンターノとの交際にたいしてゾフィー・メローに警告した。手紙のなかで情愛をこめて「わたしのかわいい子！」と呼びかけた美しい女友達の近くから、ライバルを最後に追い払ったことを、シュレーゲルは喜んだ。

その間にゾフィー・メローは小さな娘のフルダとともに、カンブルクの親戚のところへ引っ越した。そこでカール・メローとの離婚をまった。その離婚は1801年7月27日ヘルダーの司会のもとでとりおこなわれた。その決断は彼女にはむずかしいことだった。なるほど彼女は、その侮辱的な関係を「是が非でも」解決したかった。——しかし、その代償は高いものについた。それは女にとって名声や社会的評価の喪失、友人や信頼を失うことを意味した。離婚証書のなかで取り決められた毎年の200ライヒスターラーは、彼女と娘にとって十分ではなかつたろう。

ゾフィー・メローは、一人でただ自分の作家としての能力を信じて一步を踏み出し、生計費をかせぐ最初の婦人にはいる。女性の作家達の歴史のなかで、彼女は最初の女流職業作家とみなされる。1803年、仕事は半年の間に700ライヒスターラー以上ももたらすと、彼女はクレメンスに報告することができた。それによって彼女は、ワイマールでギムナジウムに通い、のちに医者になった15歳年下の弟カールに、財政的な援助をしていたことはあきらかだった。

当時、結婚を解消した教養階層の婦人達の数はかなりのものだった。しかし、たいていの婦人達は、あたらしい関係へのしっかりした見通しなしには、安全な場所を離れなかつた。こうしてカロリーネ・シュレーゲル＝シェリングの場合、テレゼ・フォルスター＝フーバーとドロテア・ファイトの場合、カロリーネ・フォン・ヴォルツォーゲンとクレメンスの妹ルル・ヨルデンの場合、みなそうだった——彼女達はみんなゾフィーの交際仲間の女達であった。クレメンスは女性を虐げている状況を知っており、1800年10月愛する妹ゾフィーの死後、つぎのような手紙をサヴィニーに書いている。「ごらんささい。こうしてゾフィーは死にました。彼女は社会に押しつぶされたんです。しかし、メローは生きています。」

ゾフィー・メローは結婚解消後、確信のもてない状態にあった。「現在のわたしは、うつろな静寂のなかにあり、未来はわたしの心には、雲のようである……………わたしは煉獄の火のなかにおり、つぎの状態は天国か地獄に違いない。」(1801年12月1日)しかし、ロマン主義の精神にのっとって、自らを

解放することに彼女は成功した。彼女は独立し、だれにも頼らず自由になった。

「世間に反抗して」——この自由への一歩には勇気が必要だ。クレメンスとの関係をのちに誠実に支援した彼女の友人シャルロッテ・フォン・アーレフェルト（1781—1821）は、この勇気を持たなかった。ゾフィーにあてた保存されているが未公開の手紙には、愛していない男に縛りつけられた女の不幸が述べられている。このように因習的合意に結びつけられた結婚を、ゾフィー・メローは十分知っていた。彼女の周囲には、シュタイン夫人、シャルロッテ・フォン・カルプ、ポグヴィッシュ夫人が生きていた。——そこにはザクセン・ヴァイマールのルイーゼ、ガリツィン侯爵夫人、ヴァイマールの女友達ヘンリエッテ・フォン・エグロフシュタイン、クロイツァー夫妻がいた。彼女自身の母は父よりも23歳若かった。そしてクレメンスの母マクシミリアーネも、21歳年上の夫と結婚するさい、諾否を問われなかった。

このような状況にある婦人達は、しばしばあの時代の文学の題材である。ゾフィー・メローの小説「アマンダとエドゥアルト」では、女主人公は生存の充実のためにたたく、若い不幸な結婚をした女である。それは婦人問題の肩入れをしている、この女流作家の特別な状況やそれへの関与と一致する。すでに彼女の最初の小説のなかに、その論拠がある、「しかし直接、法の保護をうけられる権利を、女達はどこにもっているのか。——女達はどこでも、もう男の横暴に支配されてはいないのか？……………女は守られているというより、むしろ単に耐え忍んでいるのではないのか？」

けれどもゾフィー・メローは、こんにちの意味における「権利平等」の要求をしたのではなかった。彼女は別の道をいく。つまり女性の解放は、女が男より優れている女性特有の素質の完成によるのである。自然に対する深い感情、直観的な判断力、誤った教育によって歪められていない感情の強さ、といったものがこれにはいる。男はこういった能力をみずからのなかに造りあげる努力をすべきである。「女達は生まれつき善良であり、自分達がいかにあるべきであるか」「考察」している。「女の性質のなかで模範とされる静かな調和に、男達は達しようと努めている。」小説「アマンダとエドゥアルト」のなかで男はいう。「女はすべてのものの中心である。かれらは偉大な芸術品の、あらゆる人間的な行為や企ての、もっとも内的な原動力である。われわれは外の車輪である。そして当然われわれの、より強い動きはいつも目にみえるが、一方あの原動力はたい目にもみえず、ただ鋭い眼差しのみがそれに気づくことができる。」

ゾフィー・メローは、あの初期ロマン主義の婦人達に入る。その婦人達の自意識が、社会において自らの役割を主張することを次の世代に可能にしたのである。彼女のような文学の大家によって、1800年以後の教養ある婦人の自己認識は、決定的につくられた。それは彼女の仕事にもあてはまる。外国文学をドイツ語に翻訳するさいに、彼女は解放に目を向けた模範的性格をもった人物を意識的に選んでいる。スタール夫人の著者やニノン・ド・ランクロについてのエッセイによって。「首都への逃走」（1806年）のような彼女の物語でも、独立している女主人公は著者のように人生を自分で決めようとしている。

女流職業作家の生活をとりあつかうことは、出版業者にたいしても、批評家や読者にたいしても問題であった。なるほどケルナーやヴィルヘルム・フォン・フンボルトは彼女の仕事をほめている。そしてヘルダーの批評は好意的である。しかしただ、彼女が女性にふさわしい事柄の限界をふみ越えないという前提のもとでそうなのであり、1801年の「一般文学新聞」でいわれているように、「創造的精神の領

域のなかに、女らしい気づかいを入れて身をささえている。」という前提のもとでのみそうなのである。ヘルダーがエアフルトの学者通信でいったことで、それはさらにあきらかになる。「……しかし当然、女の詩は男達にとって絶対、例外なく無条件の大家はありえないし、あることを望みもしない、ということになる。」「男の詩と女の詩という境界をもうけることによって、その女流詩人の詩は美しい庭で花咲くのである。彼女はけっして性の限界を踏み越えなかった。彼女の感情や感じたこと……と彼女は心からいう。ときおり女らしく」

クレメンス・ブレンターノも、ものを書く婦人にたいする嫌悪の情を隠さない。そしてゾフィーが彼の詩をゲッチング文芸年鑑に載せなかったのも、彼女に機知にあふれた皮肉な口調でつぎのように書いている。「詩をつくることは女にとってとても危険だ、が文芸年鑑を出版することは、もっと危険だ。」それぞれの言葉に下線をひき、「ルドヴィッヒ・ティークの教養ある女への反感」についての所感と関連づけて（1803年1月10日）

ゾフィー・メローの詩は、幸運なことに読者に歓迎された。出版業者は引き続いて詩を頼んだ。それはライヒアルト、ツェルター、ベートーベンによって作曲された。保存されている編集者との文通が証明しているように、彼女は商人的、組織的手腕でもって需要に応じている。その際には謝礼や紙のねだん、版や装丁が問題である。彼女は編集の仕事もひきうけている。1799年—1800年のベルリン婦人カレンダー、1799年—1801年のゲッチング小説カレンダー、1803年のゲッチング文芸年鑑を自分の編集で発行している。シラーがヴァイマルで上演しようとしたコルネイユの「ル・シッド」の翻訳のような別の仕事もあわせて。1802年3月20日にシラーはゲーテに手紙をかいた。「メロー夫人はコルネイユの『ル・シッド』を脚色しているといいました。わたしたちは、この仕事でお互いにくらかの影響をあたえあうことにより、できれば劇場用に仕上げようと思いました。」しかし「ル・シッド」は印刷にも上演にもいたらなかった。

1802年秋まで、ゾフィーはカンブルクで隠遁して暮らした。ときたまゴタの鞭打苦行者のような友人達や、彼女に恋文をおくったアウグスト・ヴィンケルマンのような協力者、文芸年鑑の編集者フェルメーレンが彼女を訪れた。1802年のおわりに、彼女は文化のうえで興味をおこさせるワイマルへ引越した。そこには首相のフリードリッヒ・フォン・ミュラー、ヘンリエッテ・フォン・エグロフシュタイン、ルイーゼ・フォン・ゲッヒハウゼン、アマーリエ・フォン・イムホーフといった友人達が待ちうけ、そして彼女がかなりたくさん詩を捧げたゲーテが生きていた。

しかしどんな場合にもブレンターノに、彼女は再会しようとしなかった。わずかに文学的成果を通して、彼は彼女といっしょに一冊の本に参加しているのがわかる。1802年の秋、ゲーテが彼に「ボンセ・デ・レオン」をおくりかえした、ぼほおなじときに「1803年のための文芸年報。愛と友情に献呈」が世にでた。それには「ゴドヴィ」の場面にテキストとともに銅版画が掲載された。ゾフィー・メローは「イエーナの領主の泉」と「憎しみと愛」という詩を出した。それいがいには、1801年12月から1802年12月まで、一通の手紙も、彼女からの返事もない。情熱的かつ専制的な友人との再会を、ゾフィー・メローは当時徹底してさけていた。

「わたしは、あなたに逢うことはできないし、逢いたくありません。」と彼女は書いた。「なぜあなたは、わたしに逢いたいのでしょう？——われわれの再会には何も楽しいことはありません。あなたはかつて、わたしの意志を尊重すると約束しました。いま、そうしてください。わたしに逢わないでく

ださい。」——「でもわたしが、あなたの人生に関心をもたないなんて、お思いにならないでしょうね。」

(続く)